ウクライナ情勢

ロシア軍がウクライナに侵攻して４日経ちます。
ウクライナ軍が勇敢に戦ってロシア軍を食い止めているのか、ロシア軍が首都であるキエフ侵攻に当たって慎重に準備しているためか、ロシア軍の進撃が当初予想されていたよりも遅れているようです。
それでも、質・量共に軍事力の差は圧倒的であり（ランチェスターの法則：近代的戦争で集団戦の場合、戦力の多い方が圧倒的に有利となる）困難な闘いになる状況は変わりないですが・・
このままでは、キエフが市街戦の舞台となる恐れは多分にあります。
戦闘において最も避けるべきは、市街戦であり、攻める側も守る側もその住民にとっても被害は甚大なものとなります。
第二次世界大戦において幾つもの大都市で市街戦が繰り広げられ、悲惨な結果となっております。
市街戦を避ける唯一の方法は、非武装都市（Open City）宣言（都市単位での無条件降伏のようなもの）をする事ですが、ゼレンスキー大統領がキエフに留まっており、徹底抗戦を命じている状況では不可能と考えられます。

ゼレンスキー大統領は 18 才～60 才までの男性に動員（一般市民を兵士に育てること。反対に兵士を一般市民に戻すことを復員と言う）令を出したとの事ですが、一般市民を戦力化するまでには、軍事教育や訓練が必要であり、ある程度時間がかかるため今回の戦争には間に合わないでしょう。
順当に予想すれば、ウクライナ軍はロシア軍に降伏し武装解除される。その後、平和維持軍の名目でロシア軍はウクライナに駐留することになる。
その時、今回軍事訓練を受けた市民が非対称戦争（ゲリラ戦）を挑んで駐留軍を苦しめることになる。結局ソビエトがアフガニスタンから撤退し、アメリカもアフガニスタンから撤退したように、多大な犠牲を強いられた末にウクライナから撤退することになるのでは無いでしょうか。

古来より、シーザーにしろ、ジンギスカンにしろ、スターリンにしろ独裁者と云う者は、広大な領土を持ちたがるものですが、その領土内の人民が同一国民としての意識を持てなければ、どれだけ弾圧により国家分裂を避けようとしても、結局分裂してしまうことは歴史が示す通りです。
広大な領土から得られるプロフィットとその領土を維持するためのコストを比較すれば、割が合わないことは現代の常識です。
互いに独立国として認め、貿易をした方が、力で押さえ付けるより遙かに多くのプロフィ

ットが得られます。
プーチン大統領は時代錯誤の愚か者としか言えません。

プーチン大統領はベラルーシでの和平交渉を提案しているようですが、実質的に無条件降伏をウクライナに迫っているのと同義であり、ゼレンスキー大統領がベラルーシに到着した途端、逮捕され犯罪者として拘束される恐れがあるため、受け入れない方が良いでしょう。
和平交渉は、中立な第三国でもたれるべきでしょう。

今から３０年以上前冷戦と呼ばれる時代があり、自由主義諸国は共産主義諸国抜きで世界的に経済を行っていた訳で、今後ロシア抜きで経済活動を行うよう考えるべきでしょう。

今回は、流動的情勢の中で纏まりの無い話となってしまいましたが、独裁者が強力な軍備を背景に無理難題を仕掛けて来る危険性は単にウクライナに留まるものでは無いと思います。